ふるさと探訪

第一部・猿橋物語

大黒屋旅館

おばあちゃん、観光客へ訴え

木造の橋にと署名集め

<2>

さるはしや　蠅（はえ）も居の　笠の上　　作者不詳

苦業の作との説もあるが、句碑はなく、さだかではない。橋から水面まで約三十㍍。吸い込まれるような恐怖をハエの心情に託したもので、猿橋をよく表現した名句とされている。

もっともこの怖さもとりようで、猿橋はありがたくない代名詞をちょうだいした時代もある。つまり〝自殺の名所〟。

大黒屋のおばあちゃんが語る。

「もう随分前の川開きの日でね、橋はゴッタ返していた。その中にどうも様子のおかしい女性がいる。『あなた、どうしたの』と店を飛び出したら、ドッ、ブーン。当時は水量が多くて、水しぶきが橋の上まで。病気と失恋からとか。お気の毒でした」

〝自殺の名所〟はやがて上流にできた別の橋に移り、猿橋は汚名を返上できた。

そんな暗い思い出は別にして、大黒屋に出入りする人々も時代とともに変わった。甲斐絹の集産地として市が立った昭和初めごろまでは、手織りの羽織地を担いだ近在の農家のだんな衆が立ち寄り、ひと休み。終戦直後は進駐軍の兵隊さんの常宿になった。十二、三年前の夏には原水禁運動の平和大行進がにぎにぎしく通っていった。

しかし、その足音を聞きながら、いつか昭和二十六年架け替えの猿橋は病んでいた。平和大行進が去って間もない四十八年に通行禁止。五十年の台風では橋の欄干が倒れ、おばあちゃんが針金で〝応急修理〟する騒ぎさえ起きた。

そんなある日、地元に妙な風聞が伝わってきた。「県と市が猿橋を永久橋にするらしい」

昔ながらの名橋「猿橋」と共に歩んできた大黒屋旅館の栄子おばあちゃん

と。もっとも永久橋なら、すぐそばに新猿橋（昭和九年完成）があり、その必要性はない。この〝永久橋構想〟は関係当局も否定し、どうやら幻の話だが、当時の地元は知る由もない。

「鉄とコンクリートの橋なんて、とんでもない。猿橋でなくなってしまう」。おばあちゃんは署名集めを思い立ち、店に一冊のノートを置いた。

五十三年から始まるそのノートには、全国各地からきた観光客の署名がズラリ。「一日も早く架け替えを」「せひ木造の橋で」などの添え書きも見える。ただ、この〝署名簿〟が役所に提出される前に架け替えが本決まりになった。

「橋ができたら、当時の人たちに知らせてあげなくちゃ」。猿橋の観光ガイド兼管理人のおばあちゃんは厭託なく笑った。